

## 東芝の宇宙開発

Toshiba's Space Development Activities :  
Committed to People, Committed to the Future末永 雅士  
Masashi Suenaga

1994年は、純国産H-IIロケットの打上げ、向井千秋さんが搭乗したスペースシャトルコロンビア号による国際微小重力実験、純国産大型衛星きく6号(ETS-VI)の打上げなど、わが国の宇宙開発および当社の宇宙開発事業にとって非常に意義のある年であった。このような時期に宇宙開発特集号をお届けできることは誠に喜ばしく思う。

世界の宇宙開発産業は今日大きな変化を迎えている。冷戦構造の終結に伴い、政治的あるいは軍事的な意味合いが薄れ、新たな宇宙開発の方向に動き出している。

それは、通信・放送の分野に代表される商業市場での国際競争力の向上であり、宇宙ステーションに代表される国際協力の流れであり、また地球観測に代表される地球的規模の課題への取り組みである。また、宇宙開発の手法においても、米国のクレメンタイン衛星開発プロジェクトにみられるようにBetter, Faster, Cheaperをスローガンにした経済性と効率性を重視した傾向がみられる。

一方、わが国では、宇宙開発委員会(SAC)が策定した宇宙開発政策大綱に基づき、平和目的に徹して科学技術の振興という位置づけで計画的に宇宙開発が進められ、宇宙開発の各分野で期待どおりの成果を挙げてきた。

当社も、宇宙開発事業団(NASDA)を中心としたさまざまな宇宙開発プロジェクトに参加させていただきながら、地球観測技術、通信・放送技術、ロボット技術、三軸姿勢制御技術、複合材料技術、真空潤滑技術などの分野において要素技術を開発し、多くの成果を挙げています。

特に、1994年8月にH-IIロケットで打ち上げられたETS

-VIは、当社がシステムインテグレータとしてNASDAを支援し、約9年間の歳月をかけて開発した純国産の大型衛星であり、その規模、機能、性能は世界の大型衛星に十分比肩するものである。残念ながらアポジエンジンの動作不良のため、静止軌道に投入することはできなかったが、再プログラミング機能など衛星のもつフレキシブルな機能をフルに活用することで、通信実験を含めた多くの先端技術の実験が実施され、貴重な成果が得られている。

地球観測の分野では、温室効果気体センサ(IMG)、降雨レーダ(PR)の開発などが進められている。通信・放送分野では通信放送技術衛星(COMETS)の開発が、宇宙インフラの分野では宇宙ステーション日本実験モジュールのマニピュレータ、技術試験衛星VII型の開発などが進められている。

SACの長期ビジョン懇談会が1994年の7月に「新世紀の宇宙時代に向けて」と題する報告書をまとめ、わが国の宇宙開発のありかたと開発の進めかたが示された。その中で、宇宙開発の理念は「人類をはじめとする地球生命体の永続的な繁栄に寄与することを旨として無限の可能性を秘めた未知なる宇宙を、人類共通の財産として最大限に有効利用できるようにすること」と述べられている。これは真に当社のスローガン「人と、地球の、明日のために」が意図するところである。私達は、宇宙開発事業を通して当社のスローガンを実現し、社会に貢献できることは誠に幸せであると考えている。

今後ともわが国の宇宙開発プロジェクトに積極的に参画していくとともに、宇宙事業を発展させるべく挑戦していく所存である。